慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	北里柴三郎を支えた福沢諭吉
Sub Title	Fukuzawa Yukichi continued to support Kitasato Shibasaburo both spiritually and materially
Author	森, 孝之(Mori, Takayuki)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2017
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.34, (2017.) ,p.39- 59
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：慶應義塾大学医学部設置一〇〇年
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20170000-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第三十四巻（二〇一七年）
特集　慶應義塾大学医学部設置一〇〇年

北里柴三郎を支えた福沢諭吉

森　孝之

はじめに

北里柴三郎（一八五三―一九三一）の生涯は伝染病との闘いであった。細菌学者・医学者として研究施設の充実や医療体制の改革に尽力した。日本で最初の私立伝染病研究所を立ち上げ、伝染病対策に向けた予防治療法の研究・開発並びに後進の育成に努め細菌学の知識・技術の底上げを図った。定期的に研修・講習会を開催し、病原体の同定、顕微鏡操作など実習が教育指導の中心であった。また、衛生行政との連携を重視する北里は、一八九七年の「伝染病予防法」の制定にも参画した。更に、日本連合医学会や日本医師会の創設にも大きく係わり、現代に引継がれている医学全体の礎を築いた人物の一人である。(1)

北里は肥後国阿蘇郡小国郷北里村（現、熊本県阿蘇郡小国町北里）に生まれた。代々庄屋を務める家系で、

父・惟信、母・貞の躾と教育のもと「人のために尽くすことが大切である」とする儒教の教えを身につける。熊本医学校、東京医学校で医学を学び「医学研究の成果を実践し病気から人々を守る」ことが自分の使命と定めた。東京大学医学部（東京医学校が改称）卒業後、内務省衛生局に所属し衛生行政と学術研究の両立を具現化する。

医学の世界で大きく羽ばたき幾多の業績を残した北里には、彼を指導し支援してくれた恩師・恩人と呼ぶべき人物がいる。北里柴三郎記念室では、特にマンスフェルト（一八三二―一九一二）、ローベルト・コッホ（一八四三―一九一〇）、福沢諭吉（一八三五―一九〇一）を三大恩人と位置づけている。人生の節目で重要な示唆を与え、その後の活躍に大きな影響を及ぼした先生方である。その他にも、深く係わりのある人物として、初代内務省衛生局長・長与専斎（一八三八―一九〇二）、衆議院議員・長谷川泰（一八四二―一九一二）、事業家・森村市左衛門（一八三九―一九一九）、元内務省衛生局次長・石黒忠悳（一八四五―一九四一）、内務省衛生局同期入局の友人・後藤新平（一八五七―一九二九）などの名前が挙げられる。

北里が師事した三大恩人を年代順に列挙すると、最初はマンスフェルト。彼は熊本医学校で教鞭を執ったオランダの軍医である。医学研究の重要性と、その深遠なる学問の魅力を教え、北里を医学の世界へ導いた人物である。次がドイツ・ベルリン大学教授のコッホで、炭疽菌、結核菌、コレラ菌の発見で知られる病原微生物学の泰斗である。彼は伝染病学、細菌学等の研究を行う上で必要な資質・能力・技術の全てを北里に教えた。そして三人目が慶應義塾創設者の福沢である。ドイツから帰国した北里の業績・評価を正確に把握し、日本の学術レベルを向上させるためには北里の力が必要であると認識していた。物心両面での支援を惜しまず、私立伝染病研究所及び結核専門病院設立に向け多大な援助の手を差し伸べた。この、福沢が北里を擁護していると

いう事実が、日本社会における北里の評価を上げた一因とも推察される。欧州では輝かしい業績を挙げたが、日本で同様の成果を出せるのか、北里の能力を疑問視する者も多くいた。そんな疑念を払拭するには十分過ぎるほどの後ろ盾を福沢から受けたのである。事業に対する支援者であると共に、時には厳しく諭し叱咤激励する人生の師でもあった。

一　北里柴三郎の医学への情熱

北里が福沢と出会うまでを辿ると、そこには人と人との交流の縁が見て取れる。彼は一八八三年、東京大学医学部を卒業後、内務省衛生局に入局し東京試験所で伝染病の研究調査に従事していた。統計によると一八七二年から一九〇七年までの二五年間で、コレラ、痘瘡、腸チフス、赤痢、ジフテリアによる感染者は三〇〇万人に上り約九一万人の命が伝染病によって奪われていた。伝染病対策は日本における喫緊の課題であった。とりわけ数年毎に流行を繰返すコレラにより、一〇万人におよぶ死亡者が出ていた。その様な状況の中、一八八五年、北里はコレラの病原体を長崎で検出・同定した。これはコッホが発見した病原体と同一の細菌であった。

当時、ドイツ医学を主流とした医療体制の構築を目指す明治新政府は、若き俊英たちをドイツへ留学させていた。一八八五年一〇月、上司である長与の推薦もあり、北里にドイツ留学の命が下った。一八八六年一月から一八九二年三月まで、ベルリン大学教授・コッホの下で細菌学の指導を受け、世界的な業績を挙げることになる。一八八九年、世界で初めて破傷風菌の純粋培養に成功した。この快挙は病原体の分離・同定には「コッ

ホの要件」を満たすことの必要性も証明する結果となり、コッホからの信頼を勝ち得る事となった。更に研究を進めた彼は、破傷風菌の産出する毒素が神経障害を引き起こし死に至らしめることを突き止めた。そして、その毒素によって免疫された動物の血清中に毒素を分解する物質「抗毒素」が産生されることを発見した。これは画期的な予防治療法「血清療法」につながる重要な研究成果であり、一九〇一年には「血清療法」によりノーベル賞受賞候補となった。

留学先のドイツで六年間、伝染病に関する研究業績を積み重ね、一八九二年に帰国した北里は伝染病研究に特化した研究機関の設立を政府に願い出たのである。しかし、富国強兵・殖産興業を国策の中心に据える日本政府は新規の医学研究機関の設立には消極的で、伝染病研究所必要論には予算の関係からも否定的な対応を示していた。その時、北里を支えたのが福沢である。北里に福沢を紹介したのは、元内務省衛生局長の長与であった。この長与という人物はその昔、長崎の「精得館」でマンスフェルトと共に校務に就いていた時期があり、マンスフェルトとは旧知の仲である。長与は北里が東京医学校入学時の校長であり、卒業後に内務省に入職させたのも長与であった。北里の能力を見抜きドイツへ留学もさせている。実は、その長与自身が大阪の適塾で蘭学を学んでいる若かりし頃、適塾の先輩に福沢がいたのである。

長与は、留学から帰国した北里が「細菌学」という最先端の研究に着手できずにいる窮状を福沢に伝え、支援してくれるよう懇願した。この長与の橋渡しがあって、初めて北里に国内での成功に向けての扉が開くのである。福沢は、世界が認めた北里の力を国家発展のために活用できないようでは、日本にとって大きな損失である、との考えに至り、支援を決めたのであろう。長与の仲介により福沢と面談した北里は、伝染病研究に向けた熱き思いを語った。

感染者数・死亡者数の統計結果や、伝染病伝播経路などを分析し、北里は「もはや伝染病の制圧は一国の問題ではない」と説明した。移動手段の発達に伴い、隣国へも影響は広がり、もはや世界的に対応しなければならない状況である。伝染病研究の体制を確立せねば日本は世界から学術レベルの低い、しかも伝染病の温床地域として非難されかねない状況であった。

この時、北里にとって初対面ではあるが福沢は全く知らない人物ではない。北里だけではなく当時の学識ある人々も含め、慶應義塾の創立者で「独立自尊」の提唱者である教育者・福沢の事は十分知っていた筈である。

例えば、北里は東京大学医学部在学中に、医の本質は予防にありとする演説原稿「医道論」を執筆している。医学は理論と実践により構築される学問であり、病人弱者を救うことが医師の任務であると提言した。また、弁論に劣る人間は大成しない、として弁論部・同盟社を旗揚げし教育・政治・科学・世相等をテーマとして論じていた。

北里の「物の捉え方」には福沢の「学問のすゝめ　十二編　演説の法を勧るの説」(2)と同様の考えが見うけられる。福沢は「一人の意を衆人に伝うるの速なると否とは、そのこれを伝うる方法に関すること甚だ大なり」として演説を効果的なものとするには、それなりの方法がある。さらに続けて「視察、推考、読書は以て智見を集め、談話は以て智見を交易し、著書、演説は以て智見を散ずるの術なり」と述べ更に「然るに学問の道に於いて、談話、演説の大切なるは既に明白にして、今日これを実に行う者なきは何ぞや。学者の懶惰と云うべし」としている。演説をないがしろにしていては学者として失格であるとした。ここに、北里の「同盟社」立上げ趣旨との共通点が見出される。同盟社に属する学生の中には北里を始めとして当時の先端を行く福沢の著

作物を熟読して弁論の参考にしていたのであろう。

このような背景を考慮すれば、福沢に私立伝染病研究所の開設を願う際には、福沢の「独立不羈」の考えを持って臨んだと推察できる。出会う以前から福沢の考え・哲学・思想等を北里なりに咀嚼し理解していたと考えられる。福沢が北里のことを支援するに足る人間であるとして、支援に名乗りを上げるきっかけになったのではないだろうか。

次の北里の書簡からも両者の共通性が読み取れる。

北里は一八八八年一月一六日に留学中のドイツで留学延期願い書いた。その時の彼の心境と彼を取り巻く状況は以下の通りである。一八八六年から三年間、ドイツに派遣されローベルト・コッホの下で伝染病学・細菌学の研究を始めた。時が経つ中で、ドイツ医学の奥深さを知り、三年の期間では短すぎると実感し始めていた。そこで、是非、留学期間を延長してほしい、と願いでたのである。北里は、欧州におけるドイツ医学の先進性は各専門分野を徹底的に研究しているからだ、と分析した。日本から来た留学生はその状況を理解せず単に西洋技術・文化の修得に努め、その知識・技術を日本へ持ち帰れば使命を果たしたと思い違いをしている。本当の留学とは、欧州学術社会において研究者として認めて貰うことである、と考えていた。

以下、留学延期願いから引用する（手紙を現代語訳して記した）。

我が国からもこれまで医学の専修のため当国に留学した者は少なくないのですが、一つには、その研究範囲が広すぎるため、あるいは注目すべき学科分野が異なるため、わずか三～四ヵ年間という限られた期日でその奥義まで達した者は多くありません。帰朝して一両年は世間や医学会から尊信を得るとしても欧州

の学術社会で信認される者はなく、二～三年後に再び欧州に渡らなければ世に通用する学説を述べることができなくなる例が、これであります。こうした事情を観察して柴三郎が思いますのは、私は幸いにも官費をもってこの国ドイツに留学しておりますが、学成って帰国するとき、専門の学科において欧州の学術社会で十分な信用を得るに至り、東洋におけるその専門の学術に関する調査を引き受けて、これを欧州学術社会に報告しても欧州の学者が信用して疑わないようにならなければ、国家として、留学本来の効用が得られない、という事です。そこで、伝染病科において、柴三郎が幸いにも欧州学術社会に信用を得ますれば、我が国の学術社会だけでなく、外交・貿易に関しても政治上に益するところなしとせずと思い、他事を顧みず勉学しております。(3)

北里は日本の学術レベルを世界基準に引き上げ、日本人の能力の高さを認めさせる気構えを持って欧州に挑戦した。その心情を書状に書き込んだのであった。その結果、更に二年の留学延期が許可された。留学延期が叶った翌年、一八八九年に不可能とされていた破傷風菌の純粋培養に世界で初めて成功した。当時の定説を覆す快挙であった。更に研究を進め破傷風菌の産出する毒素を中和すれば破傷風の予防治療は可能であると発表した。毒素で免疫した動物の血清中に抗毒素活性を有する免疫体（抗体）を獲得したのである。血清療法の基礎的研究となった。ドイツから帰国する際には、プロシャ（ドイツ）政府よりプロフェッソールの称号を授与された。留学延期願いに込めた、日本の学術レベルの高さを証明する結果をもたらしたのである。

この一連の北里の奮闘ぶりを、福沢の「学問のすゝめ　十編　前編の続、中津の旧友に贈る」と重ね合わせることができるのではないだろうか。十編に次のような記載がある。

然もこの事業を成得て国中兄弟相鬩ぐに非ず。その知恵の鋒を争うの相手は外国人なり。この智戦に利あれば則ち我国の地位を高くすべし。これに敗すれば我地位を落すべし。その望大にして期する所明なりと云うべし。固より天下の事を現に施行するには前後緩急あるべしと雖ども、到底この国に欠くべからざるの事業は、人々の所長に由て今より研究せざるべからず。苟も処世の義務を知る者は、この時に当てこの事情を傍観するの理なし。学者勉めざるべからず。是に由て考れば、今の学者たる者は決して尋常学校の教育を以て満足すべからず、その志を高遠にして学術の真面目に達し、不羈独立、以て他人に依頼せず、或は同志の朋友なくば一人にてこの日本国を維持するの気力を養い、以て世のために尽くさゞるべからず。(4)

欧米列強と伍するためには知識・技術の習得は重要事項である。国家発展の為に更なる勉励と研鑽の必要性を説いているところに共通性を窺い知ることが出来る。福沢の著作物により少なからず影響を受けていた北里は自分の人生哲学の拠り所としていたのかもしれない。

二　福沢諭吉からの支援と叱責

福沢を中心とする支援者たちの努力により、一八九二年一二月、規模は小さいが私立伝染病研究所が設置され、念願の研究を開始した。翌年の一八九三年九月には結核専門病院「土筆ヶ岡養生園」が開院した。その後の運営に関しても福沢からは、常に貴重な指導を受け両施設は医学分野の発展に大きく貢献するのである。北

里は、帰国後の日本で自分の夢が叶えられたのは、これ等全てが福沢からの援助の賜物であると心に強く刻み、自分に相応の力が備わったならば、必ずやこの恩に報いると決めた。福沢に言い尽くせない程の恩を感じている北里は、一九〇一年、福沢先生を弔う辞において、先生の遺業や遺訓を心に刻み「其遺業を守り其遺訓を体し切磋研鑽以て萬一の報恩を期せんとす嗚呼悲哉」[5]と哀悼の意を表した。福沢によって開設された伝染病研究所が、数多くの業績を挙げ世界に誇る研究機関として評価されていることから、北里、一人のための保護者ではなく、日本の医学研究発展における保護者である、と言及したのであった。

さて、北里が福沢から受けた支援はハード面だけではなく、組織を動かしていく上で必要なソフト面でも貴重な示唆を受けていた。それは福沢が一八九六年一〇月一五日付けで養生園事務長・田端重晟（一八六四―一九四五）に宛てた書簡から読み取ることが出来る。

その書簡は、一九四二年一〇月一六日に開催された結核専門病院「土筆ヶ岡養生園」の創立五〇周年記念式典において北里研究所副所長・宮島幹之助（一八七二―一九四四）により披露された。

秋風人に可なり、益々御清安拝賀奉り候。陳ば、兼而御手数を煩し候ミルク、今朝到来の中一ビン、人を以て返却致し候間、御一覧下さる可く候、其の不潔なること何とも名状すべからず。斯る悪品の拙宅に来りしこそ幸なれ。若しも是が喧しき患者の許に達したらば如何ん。何と攻撃せられても一言の弁解は出来申間敷、細菌学の淵叢、消毒云々とて、其注意の周密なるは自家も信じ、又世間をも信ぜしめたる養生園のミルクにして、斯の如しとは何等の怪事ぞや。畢竟、病院事業の盛なるに慣れて、百事を等閑に附し去る其結果の、偶然に現れたるものと云うの外なし。或は是は小使共の不注意なりなどと云はんか、決

して恕すべからず。たゞの宿屋か何かにて、客に呈する食物に云々とあれば、一寸詫びを云ふて済むべきなれども、苟も学医の病院に於て、衆患者が生命を托する病院に於いて、薬品同様のミルクが此のざまにては假令ひ実際に無害にても、人のフヒーリングを如何せん。事小なるに似て決して小ならず。一ビンのミルクは以て病院中の百般を卜すべし。薬局の怠慢、料理場の等閑、医師診察法の不親切等、実に恐るべき事に存候。左れば此罪はミルク消毒場に於ける下人のみに帰すべからず。第一に院長、医長、会計局員を始めとして、其責に任ぜざるを得ず。喉元通れば熱さを忘るゝの諺に洩れず。今日僅に養生園の盛なるを見て、皆々安心得意の情を催し、浮世の流風に浴して本来の本務大目的を忘れたるか。左りとは頼み甲斐なき次第ならずや。例えばミルクの事にしても、ミルクは何処の牛屋より入るゝか、其牛屋は色々に諸方を吟味して果して信ずべき者なるや否や。牛屋信ずべしと仮定しても油断はならず。時々医師を派出して乳牛の性質を糺し、又其の搾りとりの方法、持込の途中をも窃に視察を要することなり。従前、其辺の注意行届き居るや否や。消毒場に到来の上、園員中何人の監督する所なるや。因襲の久しき、単に下人共に打任せ置くが如き怠慢なきや否や。

右の事情篤と承知致し度、凡そ大業に志す者は畢生の千辛万苦に成るものなり。細々百事に注意して辛じて目的の半ばに達するの常なり。此一段に至りては、長与氏も北里氏も共に責を免かるべからず。何卒御遠慮なくお話し下され度。或は此手紙をお示し下され候ても苦しからず。老生は明々白々に心事を申述候義に御座候。何れ其中罷出苦情を語るべく存候。匆々頓首。

二十九年十月十五日朝　諭吉

田端賢契　梧下

追而、此ビンは養生園の事業腐敗の記念として、口の處に何か毛の如き汚物ある其まゝミルクのあるまゝ保存致し度、後日に至るまで好き小言の種と存候。(6)

本書簡を読み上げた後、宮島は手紙の内容について、宛先は田端になっているが、実は北里に向けて書かれている、として次のような説明を加えた。

北里先生大得意の時代に於いて注意が足らなかったならば必ず躓くぞ。福沢先生は蹉跌を憂慮し一瓶のミルクに事寄せて斯かる噛んで含めるやうな手厳しい苦言を北里先生に与えられたのだと、私は考えるのであります。(7)

現在、この書簡は北里柴三郎記念室にて保管されているが、レプリカを表装して展示室にて展示中である。この書簡は福沢の教育者としての視点から書かれており、単に苦言を呈した訳ではない。福沢が手紙を書いた背景にあるのは、私立伝染病研究所が国から補助金を受け、養生園の運営も軌道に乗り北里が順風満帆の時を迎えていた、という事である。更に北里が実用化させたジフテリア血清も国立血清薬院にて事業化され、社会における評判は高まりつつあった。そんな絶頂の中で、北里に慢心あれば懲らしめようと機会を狙っていたものと考えられる。田端からこの手紙を見せられた時、すぐさま福沢の許へ出向き詫びたという。

養生園は、亡国病と称され死因の上位にある結核を撲滅するために福沢の肝いりで開設された病院である。私立伝染病研究所設立と同様に北里に託した思いは計り知れない。自ら土地を提供し「土筆ヶ岡」と命名した

のは福沢である。最大の恩人を裏切ってしまった、と北里は思ったであろう。しかし、それは北里にとっては緩んだ箍を締め直す良き機会でもあった筈である。研究所・養生園の設立には福沢の働きかけで多くのヒト・金・モノが動いていた。この手紙は北里に成功の陰に潜む落とし穴のあることを教えたのであった。

研究所長、経営者、管理者等にとって、信用・信頼の失墜は命とりとなる。研究成果の実践を標榜する北里にとって品質の保証は必須事項である。福沢のいうようにミルクだけの問題ではない。臨床に供される血清や薬剤は大量に製造される。その製造過程、労働環境、そして出荷前の安全性の確認、これ等の作業に関する管理は万全であるかを問い正したのである。慢心を戒めるだけではなく、組織の長としての責任を明確にしたのである。北里を導き教育しうる人物は福沢を置いて外にはいない。正しい行動規範を北里に叩き込んだのは福沢であり、この書簡もそれを証明する一つである。

三　福沢諭吉への感謝の念

北里は一九一五年一月一〇日、三田の慶應義塾において挙行された福沢の第八二回誕生記念式にて次の演説をした。

顧みますれば今から二一年前のことであります。私が欧羅巴から帰りまして、多少修得致しました所の学術を、実地に応用しやうと思ひましたけれども、何分経験もなく実力もなき一介の貧書生に過ぎなかったので、如何しやうと手を拱して居りました際に、福沢先生並びに森村翁の御助力に依り、私の聊か学び得

ましたる学術の研究を進むるの途を開くにいたりました。(8)

北里は福沢や森村などの協力を得て、私立伝染病研究所をスタートし、既に二一年経過したことから話し始めた。続けて、一八九九年には内務省管轄の国立へと移譲された。この時、福沢は政府の方針が時局により再度、変更することを危惧していた。そこで政府のいかなる政策変更にも対応できるよう蓄財を指示する一方、北里が理想とする研究所運営が不可能ならば、独立して初志を貫徹するようにとの忠告も与えた。その蓄財のために福沢が北里の下に据えたのが事務会計のエキスパートである田端であった。そして、一九一四年、福沢の予言通り政府は行政改革の一環と称して国立伝染病研究所の所管を文部省に変更してしまった。これは北里の研究方針とは相反するものであった。辞意を表明する北里に向かって政府は慰留を試みるも北里は強く反駁し辞職した。新たな研究所設立までの経緯と自身の決意として、更に演説を続けた。

学者が学問の研究をするのに、所管が変わっても差支はないではないか、何も毛嫌ひをするには及ぶまいと言つて懇々説かれましたけれども、私は断然辞しました。と云ふのはそこが私の福沢先生から精神的感化を受けました所で、人間の独立自尊はここにあると私は考へたからでございます。［中略］自分の専門とする学問に依て国家の為に尽くしたいと考へて居ります。又さう云ふことが私は福沢先生の御遺志にも副ふこと、考へて居ります。学問の神聖と云ふものは、如何なる暴政府といえども、如何なる人でも圧迫することは出来ぬ、自分の学問の主義方針の為には威武にも屈せず、富貴も淫する能はず、貧賤も移さぬと云ふことの出来たのは、全く先生の御教訓の賜であると存じます。(9)

福沢が懸念材料に挙げていた政府の方針転換が現実に起きてしまった。しかし、教えに従い蓄財していた資金を以て北里は自身の主義主張を貫き通し、新たな研究所設立に結びつけることが出来たのであった。全てにおいて福沢に感謝の意を表する北里は折に触れて福沢への報恩の意を表し、恩に報いる時を待っていた。

一九一六年四月四日、慶應義塾評議員会は医学科の設置を決定した。北里は医学科長に推挙された。コッホに研究の本質を学び、福沢に人生の本質を学んだ北里は、自身の持てるすべての力を投じて慶應義塾大学医学科開設に動き出した。官立医学に対抗しうる私学としての医学を目指すのである。

四　北里柴三郎の報恩の証

北里は、私立伝染病研究所・国立伝染病研究所・北里研究所時代を通して、伝染病対策とは医療の充実とその実施であるとして、一貫して「学術研究成果の実践」を信条として掲げた。北里が研究者に求めた要件は、実践を念頭に基礎研究を繰返し予防治療法に繋げる糸口を見つける事であった。これが北里の目指す医学者の姿である。また、理想的な臨床とは基礎医学と応用医学との融合であり学科・診療科の壁を越えた連携であるとした。

実は、北里は当時の大学における医学研究に不満を覚えていた。一九一四年一〇月一九日、文部省に辞表を提出したが、その伝染病研究所辞職の理由として挙げたのは北里が理想とする研究所の運営体制の崩壊である。北里が追い求める伝染病研究所とは、連携を重視した総合研究を中心とした医療を実践する場であり、大学特有の各科孤立した単独医療には学術発展においての弊害がある、と断言した。

文部省所管の伝染病研究所は実質的に東京大学の附置研究所となり、教育・研究に焦点が当てられると北里は推察した。北里の懸念する点と理想とする点を記す。

【懸念材料】

文部省所管の伝染病研究所

・各科の教授は専門的研究に没頭し独立・孤立

・疾病を研究し臨床面での応用に向けた努力とその意識の欠如

・当時の大学内、病院内にはびこる縄張り意識の強さ

・一極集中の危うさに警鐘を鳴らす

【理想的研究】

北里の目指す総合研究

・コッホ直伝のシステムを導入

・内科・外科・生理・病理・解剖・衛生・細菌・医化学など専門家が結集して患者をケアする（現代の「チーム医療」の先駆け）

・病室を設け研究・臨床の連携を図る

これ等を慶應の医学科教育に生かすよう調整を図り有能な教授陣を全国から募った。もちろん、北里研究所の部長級の研究者も動員された。

一九二〇年一一月六日、慶應義塾大学医学部及び附属病院開校開院式の挨拶に臨み、北里は、自分は福沢門下では無いが、賜った恩は門下生以上であると切り出した。そして「我らの新しき医科大学は、多年医界の宿弊たる各科の分立を防ぎ、基礎医学と臨床医学の連携を緊密にし、学力は融合して一家族の如く全員挙って斯学の研鑽に努力するを以って特色としたい」[10]と宣言し、「優秀なる医師と堅実なる学者の養成」並びに「剛健なる人格の陶冶」を教育方針に据え、大学は教育の場であり、深奥な学理を討究する場でもあるとした[11]。

慶應医学は、従来の大学における教育体制の不備を改善した教育機関となったのである。

引続き挨拶に立った石黒子爵［石黒忠悳］は往時を振返り福沢・長与・森村・北里の縁故を追想してこう述べた。

> 今日この大学の門を潜る者は福沢先生の事を想い出さないものはあるまい。明治の初年に於いて、福沢先生の勢力は実に偉大であって、文部省は竹橋にあるが文部卿は三田に在りとまで称せられたものである。往年北里博士欧州留学より帰り、伝染病研究所設立に際して逆境に立たれたとき、私も其の相談にあずかり、私の友人長与専斎翁から福沢先生に話し、福沢先生と森村翁との後援で、伝染病研究所の基礎が出来たのであった。かかる縁故があって、今日福沢先生の宿志たる医科大学が北里博士を中心として、かくも盛大に開校式を挙行するのは実に感慨の深きを覚える。私の眼前には福沢先生の音容彷彿として肩をたたかれるの想いがある[12]。

後年、枢密顧問官となった元塾長の鎌田は慶應義塾大学医学部創設時を振返り、竣工した病院に魂を入れた

のは北里であると語っている。彼の医界における大勢力のお蔭で有力な学者が慶應医学部に集結した。そして熱誠を持って教育に当たられた、と述べている。(13)

一方、一九一六年一二月二七日に医学科設立認可を受けているが、北里はそれに先立って「慶應義塾医科大学の抱負」を語っている。大阪毎日新聞　一九一六年一一月二〇日に掲載された。

北里は従来までの医学教育を鑑み、改良すべき点は改良し、私立慶應義塾医科大学を世界の進歩に添う方針で臨みたい、として次のように述べている（原文は文節を考慮して著者にて改行をした）。

吾々の慶應大学にては成る丈、教員其の人は専門の智識を供へたるものを以て充てたい。
医学の内専門の智識を持つて居るものを以て学生を指導させたい。
而して其専門の粹を抜いて教育させる教師が専門に通ぜぬものであれば、生徒は其の教授より教へられても取捨に苦しむ。選択して良教授を得るのは困難でない。
私の手元へも既に数人の候補者がある。学科しだいでは此内より選択も出来るし吾々の信用し得べき人が多数にある。
医育の弊は、内科に病理の研究を要する場合に於いても、其他細菌学の受持の病人に対しても受持ちの病人は部外の人には手を付けさせぬ。
官立の医科大学には殊に此点が目立つ結局之は統一を欠くという事になる……。(14)

慶應の医学は相互に連携し診療・研究を推進していく、北里はこの方針を教育の根幹としたのである。更に

は卒業後も門戸を開き日進月歩で進歩する医学に対応できるよう研究設備の提供にも優遇措置を講ずる用意があることを示した。長年、医学に携わってきた経験と実績の集大成であり北里が理想とする研究・教育・診療を一体化した施設なのである。

本稿、「二　福沢諭吉からの支援と叱責」にて記述した結核専門病院「土筆ヶ岡養生園」の創立五〇周年記念式典で挨拶に立った宮島は次のような訓話も残している。

我々は申さば学縁即ち、学問上の縁によってつながれている。只今お聞き及びの通り福沢先生の尊い御精神に則り、北里先生は国の為に又、学問の為にお尽くしになった。そうして現在の北里研究所を建てられ、更に慶応義塾の医学部を創設されて、今日我々は其の恩に浴しているのであります。若し、我々後進の者共が先生の恩を忘れて、研究所や慶應医学部の名前を傷つけたりするようなことがあっては相済まぬじゃないかと思ふのであります。(15)

北里研究所並びに慶應義塾大学医学部がこれまで積み上げてきた功績と今後、社会に果たす役割を再認識しなければならないと提言している。

おわりに

北里は一九二八年、慶應義塾評議員会より感謝状(16)を授与された（旧字体のママ記載）。

貴下曩ニ慶應義塾大學醫學部創立ニ方リ奮ッテ創立事務ニ參畫セラレ爾来學部長並病院長トシテ斯界ノ俊英ヲ網羅シ多年献身的ニ經營ノ任ニ當リ今日ノ盛運を齎ラシ慶應義塾ノ爲多大ノ貢献ヲ致サレタルハ誠ニ感謝ニ堪ヘズ今回病氣の爲辭任セラレタルニ依リ茲ニ評議員會ノ決議ヲ以テ記念品ヲ呈シ深厚ナル謝意ヲ表ス

昭和三年五月十五日　慶應義塾評議員會長鎌田榮吉　　慶應義塾長　林　毅陸

男爵北里柴三郎殿

多年に渡る功績を労うもので、これを機に北里は医学部長を後進の北里研究所部長・北島多一に託したのであった。

この時点で北里の福沢に対する報恩は一つの節目を迎えたのではないだろうか。北里は既に七五歳になっており七八歳で逝去される三年前であった。そして北里研究所長、日本医師会長、等の役職も後進の北島に譲り、土筆ヶ岡養生園長、恩賜財団済生会芝病院長は大谷彬亮に任せたのである。北里は、優秀な人材の育成にも成功したと言える。

北里は福沢の教えを行動規範の中心に据え医学の成果を以て社会に貢献した。そして福沢への報恩の証として慶應義塾大学医学部の新設に尽力したのであった。

現代を生きる者たちは北里を支援した福沢と、それに応えようとして医学の発展に邁進した北里の生涯を知

り、そこから、自分なりの教訓を得ることも大切であり学ばなければならないと感じている。

注

（1）「はじめに」は『北里柴三郎』学校法人北里研究所、二〇一二年、を参照にした。

（2）小室正紀、西川俊作編『福澤諭吉著作集』第三巻、慶應義塾大学出版会株式会社発行、二〇〇二年、一二六―一二九頁。

（3）『留学延期願』、北里柴三郎の書簡、一八八八年、北里柴三郎記念室所蔵資料番号K00145。

（4）小室正紀、西川俊作編『福澤諭吉著作集』第三巻、二〇〇二年、一一〇頁。

（5）『北里柴三郎論説集』（社団法人北里研究所発行、一九七八年）、所収の「弔辞　福澤先生を弔う辞」、七八四頁。

（6）『北里柴三郎』学校法人北里研究所、二〇一二年、六八―六九頁。本記念式典は慶應義塾大学医学部北里記念医学図書館にて一九四二年に開催された。

（7）宮島副所長「福澤先生と北里先生」、『創立五十周年記念式典』北里研究所発行、一九四二年、二九頁。

（8）『北里柴三郎論説集』（社団法人北里研究所発行、一九七八年）、所収の「演説　学問の神聖と独立」、一四六九頁。

（9）同前書、「演説　学問の神聖と独立」、一四七一―一四七三頁。

（10）宮島幹之助、高野六郎編『北里柴三郎伝』（北里研究所、一九三二年）所収の「慶應義塾大学医学部」、一〇一頁。

（11）同前書、「慶應義塾大学医学部」、一〇三頁。

（12）同前書、「慶應義塾大学医学部」、一〇二頁。

（13）鎌田栄吉「北里先生追悼会に於て為されたる諸名士の追悼演説　追悼辞（四）」『細菌学雑誌』、一九三一（四二九）、九五三頁。

（14）『北里柴三郎論説集』、「談話　慶應義塾医科大学の抱負」、一五四四―一五四五頁。

（15）宮島副所長前掲、『創立五十周年記念式典』北里研究所発行、一九四二年、三三頁。

（16）北里柴三郎記念室所蔵資料番号 K00551。